

専門職の人たちの積み上げてきたキャリアや能力への敬意がないと批判が集まった。さらには、スポーツ庁と文科省が、全国の大学と高等専門学校に向けて、大会の日程に配慮して二〇二〇年の授業スケジュールを作成するよう求める通知を出すという事態も起きた。本来、自発的行為であるはずのヴォランティアの概念すら打ち砕くこの通知は、動員の政治のなかにオリンピックヴォランティアが含みこまれていることを露呈する出来事だった。まるで学徒動員ではないのかといった厳しい声もあがった。

3 オリンピックと参加型権力

こうして次々に生じる問題を眺めてみると、確かに「やりがい搾取」「ブラック労働」といった批判はもつともなことだと言える。だが、少し角度を変えて見てみるなら、合計一万人を一般からつのであるというオリンピックヴォランティアには、また別の戦略が見え隠れする。大会ヴォランティアのサイトには「オリンピック・パラリンピックの成功は、まさに「大会の顔」となるボランティアの皆さんの活躍にかかっています！」と書かれている。⁽⁵⁾ここから読み取れることは、やはり「感動の先物取引」であり、あなたが「大会の顔」だというアクティヴな参加のプロモーションだ。ロンドン大会が「ゲームズメーカー」という名称を使ったように、二〇二〇年東京大会でも名称が募集されている。そのなかで候補にあがった「シャイニングブルー」という名称案には「ボランティア一人一人が輝く」「ボランティアが選手や観客を輝かせる存在」という言葉がつけ加えられている。⁽⁶⁾大会を盛り上げる主人公として輝こうというこのメッセージは、まさに

参加型権力のレトリックをよくあらわしている。

このように自発的に、自由意思によって自分が主人公として活動していくことが、オリンピック開催のエネルギーになったのは、じつは最近ではないという考え方もある。ナチスによって主導されたベルリン大会における「動員」の構造を読み解いている池田浩士によれば、ファシズムを突き動かした動員には、上から強制的に国民を統合していく動員のあり方(上からのファシズム)と、自分から積極的にファシズムに貢献するように活動し、主人公のように振る舞うような動員(下からのファシズム)とがある。自発的な参加によって、国民が自分から体を動かし、実際に奉仕していくという形でナチス体制を国民の側から盛り上げていく仕組みがファシズムを押し上げていったと池田は考えている。⁽⁷⁾ 池田によれば、ベルリン大会を盛り上げたのは「歓喜力行団」であり、文字通り「喜びを通して力を」集めていく、建前上は余暇を楽しむ制度である。ナチスの政治においては、厳しい強制的な労働の裏面に、このように喜びを享受する余暇という形で「奉仕」活動が準備されていた。この奉仕活動は、強制的・奴隷的にナチスのために働く営為ではない。あくまで自由意思ということで活動し、自分が楽しいこと、自分がやりたいこと、積極的に自分から行っているという満足を味わうことができ、それが社会の役に立つという気分になれるような活動⁽⁸⁾ 労働の形態である。池田は、ここにオリンピックのヴォランティアの起源を見ている。「喜びながらやって力を出しましょう」というヴォランティア運動が、動員を自発的に生み出すからくりだったと池田は指摘している。⁽⁸⁾

「歓喜力行団」は、ドイツ各地にグループとして作られた。無償で自発的に奉仕する模範的な

活動グループは高く評価され、その見返りとしてオリンピックを見物できる。「観客として動員されるその人たちは、単に観客として見に行くということだけではなく、ふだんの自発的な社会に対する奉仕の、いわば報いとして、オリンピックをつくるエネルギーの一端を担う」のである。⁽⁹⁾

二〇二〇年東京大会のヴォランティア活動にも、同様の仕組みがあることに気がつくだろう。ナチス同様、この奉仕は自分が主人公として積極的に関わっていくような「歓喜力」を打ち出す活動ではあるが、しかしではその歓喜力はどこに向けられるのか。それはやはりナチ大会同様に「オリンピックをつくるエネルギーの一端を担う」ことにある。だが決定的に違うのは、ナチスへの貢献といった明確な宛先があるわけではないということだ。その宛先は、漠然とした「オリンピックを成功させる」「オリンピックを盛り上げる」ことにある。そして奉仕の報いは、ナチスに評価されるというような明確なものではなく、オリンピックを支え、作り、より大会を近くで体験できるという「感動」にある。ナチスの動員体制を作り上げるための政治の道具であったオリンピックは、いまではオリンピックそれ自体が人間を自発的に参加させていく力を有しているということである。つまり、政治体制の強化に向けてオリンピックを利用するのではなく、オリンピックの強化・ブランド化に向けて人びとが自発的にオリンピックを盛り上げるという仕組みが出来上がっているのだ。もう少し、この仕組みを読み解いてみたい。

二〇二〇年東京大会の参加型権力は、一般人のなかにより運営サイドに近い人が生まれる構図を巧妙に作り出している。つまり、感動的な体験により近いところにいる人たちを配置するとい

うことだ。アクティヴに、大会により近い場所や立場でオリンピックに「関わる」という実感¹¹がより参加を促す。こうやって生み出される中間的な存在が、一般人から選ばれているというところが、主催・運営側と一般人の分断を埋める役割を果たすことになる。このようにして二〇二〇年東京大会の参加型権力は、動員を強制や圧力による受け身的なものから、参加することの喜びや満足を包含するものへと変化させている。オリンピックの主人公のひとりになるという自己実現の欲望を駆り立て満たすものの正体が、「満ち足りた参加者」たるボランティアの存在である。

だからといって、本論はボランティアという営為を否定しているわけではまったくない。次々に起きる災害の現場で、被災者の暮らしを立て直す手助けをするボランティアは、いままでも、これからも日本の市民社会に不可欠な存在であるだろう。自分の生活を少しだけ犠牲にして、被災者のために自分の大切な時間と活動を無償で提供するというこの自発的な営為は、かけがえのない貴重な営為であるからこそ、二〇二〇年東京大会のボランティアとは決定的に違うということを私たちは知る必要があるのだ。

4 排除が支える参加

二〇二〇年東京大会の参加型権力は、教育の現場にも浸透している。「東京オリンピック・パラリンピック教育」実施方針¹²(二〇一六年一月、東京都教育委員会)によれば、都内全ての公立の幼稚園、小学校、中学校、義務教育学校、中等教育学校、高等学校及び特別支援学校を対象にした

オリンピック・パラリンピック教育が実施されている。ここでは、「すべての子供」が大会に「関わる」ことが重視され、オリンピック・パラリンピックの価値や意義を学ぶことを強く要請されている。年間三五時間程度を目安に、学校内で組織的・計画的に実施されることが決められており、教育委員会が発行する『オリンピック・パラリンピック学習読本』を活用した「偏りのない教育」が推進されている。さらには、国旗・国歌の意義を理解し、これを尊重する態度を育てることがオリンピックと結びついて学ぶ仕組みになっている。重点化されている教育のポイントは、(1)「ボランティアマインド」の醸成、(2)障害者理解、(3)スポーツ志向、(4)日本人としての自覚と誇り、(5)豊かな国際感覚を身につけることである。

この教育は、明らかにオリンピック・パラリンピックを肯定的に受け入れる思考や感情や態度を醸成することを狙いとしている。また積極的に大会に「関わる」ことが強く求められている。ここで問題となるのは、児童や生徒たちの思想や信条、人権が無視されているという点だ。というのも、オリンピックに積極的に「関わる」ことやオリンピックの理念や歴史について学ぶことが、国旗・国歌を尊重する態度や日本人の自覚や誇りを身につけることに直結しているからだ。また、ヴォランティア活動もスポーツ活動もナシヨナリズムを醸成するための営為とされている。さらに問題となるのは、児童や生徒たちにこの学習を受ける／受けないという選択肢がないという点である。半ば強制的にオリンピックに関わらなければならぬのだ。公的な国際機関ではなく、あくまで私的な団体が自分たちの利権のために行う巨大イベントに積極的に参加することが、東京の児童・生徒たちに強いられているのだ。このように、オリ・パラ教育を通じて、自

発的・積極的に大会に参加し、関わり、作る主人公になることが、強制的に準備されている。

本章が、「参加型権力」という言葉を使って、あえて「権力」と呼んでいるのは、自発的な参加員が、オリンピックの力によって半ば強制的に促されているからなのだ。しかもこの教育のなかでは、オリンピックがこれまでもたらしてきた負の側面については、いっさい教えられない。「フェアプレーの精神」が読本を通じて教えられるが、オリンピックが過去に引き起こしてきた数々の問題に対しては語らないというアンフェアな態度をとっている。アスリートたちの活躍の歴史は、日本人の誇りとして称えられるが、金メダルへの社会的な重圧で命を落とした選手がいることには触れられてはいない。先の実施方針にはこう書いてある。

「これまで、オリンピック・パラリンピックは、開催都市と国に大きな社会変革をもたらし、とりわけ若者や子供たちを鼓舞し、勇気と感動を与えてきた。……その目的は、人間の尊厳の保持に重きを置く平和な社会を奨励することを目指し、スポーツを人類の調和のとれた発展に役立てることにある」

この文言に対する反証例は数え上げればきりがなが、「平和な社会」や「人類の調和」とはかけ離れた現実がオリンピック開催のたびに引き起こされていることは、知っておく必要があるだろう。オリンピックが持つ「参加」という理想が逆に「排除」によって実現されてきた事例をいくつか紹介したい。

例えば、一九六八年のメキシコ大会を見てみよう。オリンピック開催を一〇日後に控えたメキシコ市内の「トラテロルコ広場」(三文化広場)には学生、活動家、市民ら約一万人が集まっていた。

かれらはそこでメキシコ政府の独裁と腐敗した官僚制、日常生活に張りめぐらされる管理や統制に不満を突きつけ、自由と民主化を訴えていた。ところがその夜、突如、警察と軍隊から市民たちは一方的に発砲され、多くの若者や学生が虐殺された。後に「トラテロルコの虐殺」と呼ばれる軍事弾圧によって、約二〇〇〇人が投獄され、死者の数は諸説あるが三〇〇〇人ともそれ以上とも言われている。この虐殺は、公表されることのないまま、何事もなかったかのように市内は鎮静化され、オリンピックは粛々と開催された。

この大会に出場したあるイタリア人選手は「オリンピックを開催できるようにと学生が殺されているのなら、オリンピックなど行われないうちがましだ。どんなオリンピックも、歴代のオリンピックを合わせても、学生ひとりの命には値しない」と述べている。⁽¹⁰⁾ またトラテロルコ広場の集会に参加していたある活動家は、「スポーツ行事としては、我々はオリンピック開催に反対してはいなかったんだ。だが、経済的事象としては反対だった。わが国は貧しすぎる。オリンピックは、どれほど逆のことが喧伝けんでんされようとも、回復しようのないほど厳しい財政的出血を意味していた⁽¹¹⁾」。いま挙げたような数々の証言をまとめた『トラテロルコの夜』の著者であるジャーナリストのエレナ・ポニアトウスカは、当時の状況を次のように振り返っている。

……メキシコ市は、オリンピックの表の顔を一年弱のうちにたちまち出現させた。スタジアム、オリンピック村、各種スポーツ施設。……しかし、選手を迎え入れる施設が続々と建てゆく裏には、貧困、裸足の人びと、栄養失調で腹の膨れた子どもたち、食べるに事欠く農

民たち、これまでもこれからも忘れられた人びとにとって敵対的な社会とそれを横切る階級間の深い溝、どんな見せかけでも取り繕うつもり政府の残忍さが隠れていた。⁽¹²⁾

こうした証言は、人類の平和や繁栄を唱えるオリンピックが、まるで必然のように弾圧や貧困、排除をとまなうものだと訴えている。世界からアスリート、巨大企業、各国の要人たちが参加するオリンピックのもとでは、人権や法や秩序は容易に停止される。オリンピックが訴える「参加」という高尚な理念は、軍事や警察の圧倒的な力による排除によって実現しているのである。メキシコ政府の独裁のせいなのではない。ナチスのオリンピックが特別なのではない。中国の党独裁が例外なのではない。これまでも、そしていま現在もオリンピックは、貧民やマイノリティや活動家を弾圧し、排除し続けている。あるいはかれらを巧妙に取り込みながら利用している。この構図は、オリンピックが開催されるたびに繰り返されてきた。

二〇一〇年バンクーバー大会では、「先住民たちの参加」という理念が謳われたが、かれらのバンクーバーのオリンピック委員会への参加はたった一%にとどまった。都市部の貧富の格差を是正することも大会招致時の約束だったが、結果的には、競技場建設に充てられた資金が貧困対策の費用を間接的に横取りする形となった。不動産投機やマンション建設によって、貧困地区には再開発の波が押し寄せ、結果的に一八〇〇〇戸の高級分譲住宅と引き換えに、一三〇〇〇戸の低所得層の住宅が失われた。二〇二〇年東京大会が理想的なモデルとしているロンドン大会では、主要な競技会場の建設されたイースト・ロンドン地区が再開発され、集合住宅から多くの住民や零